



Title	古典主義の聴覚
Author(s)	土田, 耕督
Citation	a+a 美学研究. 2017, 10, p. 70-71
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90160">https://doi.org/10.18910/90160</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む

新古今歌壇を牽引した九条良経の自賛歌は、盟友藤原定家によって『百人一首』にもとられた。晩秋の冷涼な景に寂寥をかこつこの歌は、古歌の言葉をとり集めて構成されている。「郭公鳴くや五月のあやめ草」「さむしろに衣かたしき今宵もや」「長々し夜をひとりかも寝む」、いずれも人口に膾炙した名歌であった。

とはいえ、良経は「本歌取」をしているわけではない。本歌取は、先行作品の断片によってその表出内容全体をたぐり寄せる〈引喩〉<sup>アリユイ</sup>と定義できる。しかしこの歌は、「あやめも知らぬ恋」も「われを待つらむ宇治の橋姫」も「山鳥の尾のしだり尾」も、喚起してはいない。

良経が引用しているのは、言葉の響きやリズムに他ならない。聴覚によって感受されるこれらの要素も、内容と同じく再利用されうる。定家は、古の和歌に「及ばぬ高き姿」を見ていた。良経詠への称賛は、聴覚印象への配慮をまっけて初めて達成される古典主義の表明でもあった。

## 古典主義の聴覚

土田耕督（つちだ・こうすけ）

一九八〇年生まれ。日本学術振興会特別研究員（P.D）。専門は和歌論・連歌論を主とする日本の芸術理論。